

<高校生の部 最優秀賞>

未来に贈る「ふるさと」

山形県立致道館高等学校 3年 早川 陽斐

「山形の素敵なおところってどなたこ？」部活の大会で他県の生徒と交流したときのことでした。十七年間山形県に住んでいる私にとってその質問は簡単ではなかつた。山形県の良いところはたくさん知っているはずなのに、うまく答えられなせん。結局答えたのは誰でも知っているような観光名所について。この出来事は衝撃的で、自分がふるさとについて詳しく知らないことを正面から突きつけたのです。それからというもの、私は大好きな「山形」を見つめ直してみることにしました。そこで山形県に関する文献を読んでいたところ一つの短歌が目にとまりました。「最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片」山形が誇る歌人の斎藤茂吉の歌です。いつも何気なく見ていた最上川の情景が鮮烈に描かれていて私が気づかなかつた良さを体現してくれたのです。これだと思った私は短歌でふるさとの良さを形にしようと決めました。早速、私は山形を感じたら短歌を作る、という生活を始めました。学校生活ではまずクラスに響く方言に山形を感じました。庄内弁の柔らかな雰囲気。そして窓から覗くのは豊かな自然。そんな風景に私は「①はいちまるじゃない山形の平野を見ながらドリルを解く」と詠みました。①がいちまるとは読まないと知っていながらも方言が自然に溶け込んだ教室の風景を詠んだ一首です。このように私は山形の自然や人、文化について短歌を一首、また一首と詠んでいきました。そこで私は気がついたので。ふるさとの良さは形にしないと残らないことに。私が詠んだのは何気ない日常の風景ばかりでした。そんな他愛もない日常は切り取ろうと思わないと過ぎ去ってしまう。それではあまりに寂しいのです。そこで私は歌集を作ろうと決めました。本として残れば私達はふるさとの良さを何度も感じるができます。そして新たな良さも知ることができます。私は未来のふるさとに歌集を届けたい。そのために私は進学をし、文芸表現について学ぶことに決めました。歌集という形で今感じるふるさとの良さ、そしてこれから感じていくふるさとの良さを未来のふるさとに届けていきます。